

令和3年度
入学試験問題

第3回

国語

- 1 問題用紙は監督者^{かんとくしゃ}の指示があるまでは開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入して下さい。
- 4 記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点^{くとうてん}や符号^{ふごう}は一字として数えるものとします。
- 5 問題は1ページから19ページまであります。

受験 番号		氏 名	
----------	--	------------	--

森村学園中等部

— 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 説明のつかない不思議なものに対し、それがどういう原理で動いているのかを知ろうとするのが、経済学も含む科学というものです。私はどうして単なる紙切れである一万円札を持っていると、ニコニコするのでしょう。皆さんだって、一万円の小遣いこづかをもらえればうれしくなりますよね。

私たちは紙を食べるヤギではないので、モノとしての一万円札があるからうれしいわけではありません。一万円札には「日本銀行券」と書かれています。「日本銀行という公共機関が発行しているから価値がある」「法律で一万円の価値があると決められているから価値を持つ」と考えている人が多いでしょう。経済学者にもそういう人がいます。

日本初の貨幣である「和同開珎」という銅貨は、七〇八年につくられました。これは中国の貨幣にならって発行されたもの。当時の日本政府は和同開珎を流通させようとしたのですが、実際には全然使われなかった。どうして使われなかったのかはよくわかりません。和同開珎の多くは神社仏閣の遺跡の柱の下の部分から発掘はっくつされている。当時の人にとって銅は貴重でしたし、貨幣には難しい字が書かれていたので、もっぱらおまじないとして使ったのではないかと思われまます。

奈良や平安時代の政府はおカネを発行しては人々に「使え、使え」といいましたが、ちつとも使われないので一二回やってあきらめました。ところがそのうち日本の経済は発達して、日本海を中心にして中国や朝鮮半島と活発に貿易をするようになる。すると、日本で商売をする人が、中国のおカネを使いたしたんです。中国の王朝は唐、宋、明と変わりましたが、日本では唐の時代に発行されたおカネが宋や明の時代になっても使われていた。滅びた王朝が発行したおカネですから、中国に持って行って価値を保証してもらうことはできません。それでも当時の日本人はそれを使っていた。このようにおカネの流通は、政府の思いどおりには制御せいぎよできないのです。

② 私たちがどうして一万円を持つとうれいいのかといえば、他人が一万円として受け取ってくれるからです。この「誰かが受け取ってくれる」というところがポイントです。これは物理法則ではありません。多くの人が「価値がある」と思っていることに意味がある。——社会科学の出発点は、ここにありまます。

人々の思い込み、心理、期待によって、一枚の紙切れが一万円の価値を持つ。すべての人が一万円の価値があると思うから、一万円分の価値が生じる。この論法を「自己循環論」といいます。

おカネの価値に、物理的根拠はない。「皆がおカネだと思つて使うから皆がおカネとして使う」という自己循環論が、おカネに価値を与えている。紙幣だけではなく、硬貨や金銀も同じです。昔の金銀は宝としてではなく、おカネとして他人が受け取ってくれるから、おカネとしての価値を持っていた。そうでなければ人に渡さずに自分で持ち、装飾品として使うでしょう。金銀がおカネとして使われるということは、

装飾品としてのもの以上の価値があったということです。

③ 同じことはコトバについてもいえます。コトバは単なる空気オク〜〜〜の振動しんどう。「ドロボー」といつてもすべての人間が「ドロボー」という意味にとるのではなく、アメリカで叫さけんでも誰も振り向むいてくれません。日本語を理解する人にしか通用しないわけです。

④ インクのシミである文字、書きコトバも同じです。「立入禁止」と書かれた看板を見た人は、そこに入ろうとしない。「立入禁止」の意味を持つとみんなが思っているから、通用するんです。

このように、おカネもコトバも自己循環論法の産物です。誰もがそう思っているから価値や意味を持つという、不思議な存在。だから、物理的性質としても遺伝子的性質としても説明がつかない、みんながそう思っているというプロセスで価値を帯びた、意味を持ったということです。さあ、これでおカネやコトバの本質が、かなり解明されました。

③ 次の問題は、おカネはどういう働きをしているのか、コトバはどういう働きをしているのかということです。アメリカで二〇〇七年にサブプライムローン問題、二〇〇八年にリーマン・ショックという経済的な危機が起きて、世界中に深刻な影響えいきやうを与えました。もうおカネなんて捨てちゃえばいいじゃないかとなりましたが、実際にはそうはなっていません。

人間、ホモサピエンスが誕生したのは二〇万年前で、コトバは五万年前から一〇万年前に出現したといわれています。(中略)コトバの出現が五万年前として、文字や法律、社会的制度などが生まれたのは六〇〇〇〜七〇〇〇年前。現在のイラクやトルコ周辺に栄えたメソポタミア文明がその最初で、エジプト文明などはそれよりちょっと遅おくれています。おカネが世界で初めて流通したのはギリシャで、古代ギリシャを発達させる原動力となりました。

⑤ それでは、おカネやコトバが存在する前の社会はどういうものだったのか。そういう社会では、人間は共同体に属していました。コミュニケーションといわれるものです。⑥ 古代社会の一つの共同体には、一〇〇人くらいしかいなかった。そしてコトバのない時代の共同体では、表情や身振り、叫び声などで意思が伝えられた。伝統的社会における交換こうかんは贈り物おくとその返礼という形で行われていました。贈り物をされた人は相手に義理を感じ、贈り物を返しますが、今度は返礼された人がその相手に義理を感じて、さらに贈り物をし、それを受けた人がさらに返礼するという果てしない贈り物と返礼のくり返しによって、モノが交換されていたのです。

日本に「お歳暮せいぼ」や「お中元」の習慣があるのも、そのような古い時代の、伝統の名残りです。私の両親や祖父母にとって「お歳暮」「お中元」はとても重要なことで、贈られたら必ず贈り返さなければならぬと、そのことで頭がいっぱいでした。

顔の表情や、身振り手振りで意思表示するには、お互たがいに顔を知っていないといけない。未知の人とはベーシックなことは通じてても、込み入ったことになると通じません。モノを贈ってくれた人に返礼するには、贈ってくれた人を覚えていなければなりません。だからおカネができる前の社会はお互いの顔を知らないで成り立たない。せいぜい一五〇人くらいまでの規模が限度だったでしょう。

そのような共同体は、互いに依存し合う美しい社会ともいえますが、同時に不自由でもあります。お互いが常に監視し合い、掟に外れると村八分にあう。そういう社会は内と外がはっきりしています。仲間同士は仲がよくても、外の人とは敵対する。内は味方で、外は敵。節分の豆まきで「福は内、鬼は外」というのは正にそのことです。

④ コトバさえ共有していれば、知らない人とでも自由にコミュニケーションが図れます。文字だったらもつと便利で、私が中国へ行つたとすれば、漢字を使った筆談がある程度成立する。

文字によるコミュニケーションが行われるインターネットでは、見知らぬ人とどんどん交流できます。ネットの世界には危険な側面も大きいのですが、意思疎通の範囲は大きく広げられる。おカネも同じで、流通していれば、見知らぬ人と交換ができる。昔、内と外があった時代は、外の人とは物々交換をしませんでした。また、身分が違う相手とも交易しなかった。古代ギリシャには奴隷がいましたが、普通の人は奴隷とは交換をしませんでした。

でも、おカネさえ持つていければ奴隷でも交換できた。ギリシャの一番有名な奴隷はイソップ。彼は物語を書いて稼いだおカネで自由になることができました。法律がしっかりしていれば、土地を取引することもできます。法律がないと、相手の腕力が強そうだから交渉をやめようと思ったり、権力のある人に土地を取られたりしてしまふ。

おカネやコトバ、それから法律などによって、人間は同じ人間になる。生命科学の意味ではなく、抽象的な意味で人間はお互いに平等な関係を持てるのです。おカネやコトバをつなぎ役として、人間は「世界の物理的構造」、「生物としての遺伝的本能」から、ある意味において自由な存在になることができました。そして生物学的な意味ではなく、普遍的人間の本性をつくったのです。

では、人間は誰でも等しくハッピーになれるのかというと、残念ながらそうではありません。おカネとコトバ、法律は人間に自由を与えますが、同時にさまざまな問題ももたらします。人間が「世界の物理的構造」「生物としての遺伝的本能」から自由であるということは、不安定な状態に置かれるということでもあるのです。

一万円札には、皆がそう思っているから一万円の価値がある。ところがみんなが疑いを持ち始めたら、日本政府は大丈夫かとなる。みんなが「価値がある」と思わないと、価値は失われてしまふ。コトバも同じです。多くの人がコトバの意味を疑い出すと、コトバの意味が消えていく。皆さんが日本語を大事にしないと日本語はやがて消え、英語にとって代わられる可能性があるわけです。つまり、おカネとコトバを使う社会というのは非常に不安定で、社会がグローバル化すればするほど不安定さは増します。そういう問題が実際に今、世界中で起きているのです。

(岩井克人『おカネとコトバと人間社会』より)

※ 問題作成の都合上、原文の表記を一部改めたり、文章の一部を省略したりしたところがあります。

(注) *唐、宋、明……………それぞれ中国の王朝の名前で、唐(六一八年～)、宋(九六〇年～)、明(一三六八年～)の順に移り変わった。

*メソポタミア文明……………古代文明の一つで、紀元前三〇〇〇年ごろからチグリス・ユーフラテス両川流域で栄えた。

*エジプト文明……………古代文明の一つで、紀元前三〇〇〇年ごろからナイル川流域で栄えた。

*古代ギリシャ……………ヨーロッパのエーゲ海周辺で、紀元前五〇〇年ごろから紀元前一四八年にローマ帝国に占領されるまで栄えた。

*村八分……………村落の中で、掟や秩序を破った者に対して課される制裁行為で、一定の地域に居住する住民が結束して交際を断つこと。

*普遍的……………広くゆきわたるさま。極めて多くのものごとにあてはまるさま。

問一 ———— ① 「そういう人」とありますが、筆者は「そういう人」の考えに対して、どのような立場をとっていますか。その説明として

最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「そういう人」の考えが正しいことを裏づける具体例を挙げて、それを支持する立場をとっている。

イ 「そういう人」の考えを認めつつ、補足的な自分の考えを紹介して、それを支持する立場をとっている。

ウ 「そういう人」の考えを認めつつ、対照的な別の考えを紹介して、それと異なる立場をとっている。

エ 「そういう人」の考えとは矛盾する具体例を挙げて、それと異なる立場をとっている。

問二 ———— ② 「日本では唐の時代に発行されたおカネが宋や明の時代になっても使われていた」とありますが、それはなぜですか。その

理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 滅びた王朝の発行したおカネであっても、商売の相手がおカネとしての価値を認めて受け取ってくれていたから。

イ 滅びた王朝の発行したおカネは、すでに市場に出回っていないという点で、逆に希少価値を持っていたから。

ウ 滅びた王朝であっても唐の政府は、「和同開珎」の発行をやめてしまった当時の日本政府よりも信頼されていたから。

エ 滅びた王朝ではあっても、日本海での貿易によって発達した日本の経済にとって、中国は強い影響力を持っていたから。

問三 —— ③「同じことはコトバについてもいえます」とありますが、おカネとコトバはどのような点で「同じ」のですか。それを説

明した次の文中の [] に入る二十字の言葉を [2] 段落中に求め、最初と最後の五字をぬき出しなさい。
おカネとコトバは、 [] という点で「同じ」と言える。

問四 —— ④「インクのシミである文字」について、次の問いに答えなさい。

(1) 筆者が、「文字」をこのように述べたのは、どのような意図によりですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 文字というものの、モノとしての側面やその物理的性質を強調しようとしたため。

イ 文字を用いる書きコトバが、話しコトバとは異なる性質を持つことを印象づけるため。

ウ 文字が、それを理解しない人にとっては「シミ」と同じく目ざわりなものであることを暗示するため。

エ 文字といっても、人間の視点を離れてみれば、「インクのシミ」にすぎないことを読者に気づかせるため。

(2) 本文中の~~~~アオの言葉の中から、「インクのシミ」と同様の表現を二つ選び、記号で答えなさい。

ア 『日本銀行券』 イ 「おまじない」 ウ 「一枚の紙切れ」 エ 「装飾品」 オ 「空気の振動」

問五 —— ⑤「おカネやコトバが存在する前の社会」とありますが、筆者は、「おカネやコトバが存在する」以前と以後とで「社会」がどの

ように変化したと考えていますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人々が互いに依存し合う美しい社会が、互いに監視し合い、外の人とは敵対する、うるおいのない社会へとなっていった。

イ 贈り物と返礼のくり返しによって信頼を築いていた社会が、誰とでも交流ができることで危険な側面も持つようになっていった。

ウ 少数数からなる共同体の中で身分や権力によって階層化されていた社会が、互いに自由で平等な社会へとなっていった。

エ 外の世界と隔てられて閉鎖的だった社会が、見知らぬ人とも交流や交換が可能な、広く開かれたものへとなっていった。

問六 —— ⑥「古代社会の一つの共同体には、一〇〇人くらいしかいなかった」とありますが、古代の共同体がどのようにに小規模なもので

あったのは、なぜですか。それを説明した次の文中の [] をうめる形で、その理由を七〇字以上八〇字以内で説明しなさい。

コトバやおカネのなかった古代社会では、 [] から。

問七

——⑦「人間は同じ人間になる」とは、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア おカネやコトバを使うことで、生物的な存在にすぎなかった人間が自由になり、遺伝的な優劣ゆうれつに関わらずに生きていけるといふこと。

イ おカネやコトバがあれば、人間はだれもが対等の関係性において、モノの交換をしたり意思疎通いしそつうをはかったりすることができること。

ウ おカネやコトバをつなぎ役にすることによって、人間が社会の中で平等な権利を持つ存在として、互いに尊重されるようになること。

エ おカネやコトバがあるからといって、人間は誰もがハッピーになれるわけではなく、不安定な状態に置かれることも平等にあること。

問八

——⑧「おカネとコトバを使う社会というのは非常に不安定で、社会がグローバル化すればするほど不安定さは増します」とありますが、次に挙げる「コトバ」に関する事例の中から、筆者の述べる「不安定さ」と関連のある事例として適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「やばい」という言葉は、もともと「具合が悪い」「危ない」など否定的な意味で使われていたが、近年若者を中心に「このケーキ、やばいよ！」のように、「すごくいい」「最高だ」といった肯定的な意味でも使われようになっていく。

イ 過疎化かそかと高齢化こうれいかのために方言を使う人が少なくなったある地方の自治体では、消えゆく方言を守ろうとして、毎月発行している広報誌に方言の意味や用例を紹介する記事を連載れんざいするようになった。

ウ 学校で友人とけんかをしてしまったある日のこと、帰宅してからも私が「まじむかつく」とつぶやいていたら、母は「そんなに腹を立ててはだめよ」と言ったが、祖母は慌あわてて胃薬を持ってきた。

エ 友人同士のグループLINE（ライン）で「映画に行こうよ」と誘さそわれたので、「何でくるの？」と返信したところ、交通手段を確認しなかったただけなのに、「あなたは、来るな」と意味を勘違かんちがいされて気まずい思いをした。

問九 次のア～カの中から、本文の内容に合致しないものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 経済学という学問は、説明のつかない不思議なものの原理を解き明かそうとする点で、広い意味での「科学」に含まれる。

イ 和同開珎は貴重な銅で作られ、難しい文字が書かれていたので、当時の人々は貨幣以外の用途でそれを用いることが多かったと思われる。

ウ 古い時代には、金銀でできた硬貨は装飾的な価値を持っていたため、ただの紙切れに過ぎない紙幣よりも広く流通していた。

エ コトバや文字の出現に遅れて、おカネは古代ギリシヤの時代に初めて流通したが、それによつて古代ギリシヤの社会は繁栄した。

オ 贈り物をもらったら返礼しなければならないという習慣があつた古代の共同体では、その習慣に背いた者は必ず村八分にされた。

カ 同じコトバでも書きコトバと話しコトバとは、前者のほうが見知らぬ人とのコミュニケーションでの自由度は増し、その範囲は広がる。

問十

次郎君がインターネットで帽子を買おうとしたところ、品質が全く同じでも、Aの無地の帽子とBのブランド・ロゴマークが刺繍された帽子では、Bの帽子の方が2倍も高い値段で販売されていました。これは、Tシャツなどでもみられる現象ですが、なぜこのようなことが起きるのでしょうか。本文で述べられていた「おカネの本質」をふまえて説明しなさい。

A



B



二次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

江戸時代の終わりの京都では、新しい時代をひらくため江戸幕府を倒そうとする長州藩のさむらいがひそかに行動を起こしており、それをさせまいとする幕府側のさむらいとの間でいさかいが起こることがあった。この物語はそのような京都で職人を目指す「太吉」の話である。なお、本文にひらがなでの表記が多く見られるのは原文を尊重したためである。

そのおけは、太吉にはすこし大きすぎた。なわでせおうと腰の下までであった。足をうごかすたびに、しりにぶつかってあるきにくい。足のはえたおけがひとりであるようにみえるのだろう。すれちがった人がふりむいてはわらう。

だが太吉はへいきだ。

おとくいさきにおけをとどけるのは太吉の仕事、これくらいせおえなければ、はじだ。

いま、「はよいけ、はよいけ」と、しりをたたいているのは、長州藩の京やしきへとどける水おけだ。
A 使つてある杉板がぶあついで重い。流れるあせで、きものが背中にぺたつとはりつく。

(中略)

「よいしょっ」

さがってきたおけをゆすりあげて、高瀬川にそつてあがつていく。舟入に荷物をおろした舟が気楽そうにうかんでいる。

加賀藩のおやしきのはずれにある小さな橋をわたると、めざす長州藩のおやしきだ。でも、ここは裏口だから、へいとへいにはさまれた細い路地になっている。

そのへいのすみに、小さなくぐり戸がある。

「ふうっ、重かった」

こしのでぬぐいをひきぬいてあせをふき、戸をたたこうとしたとき、人かげがふたつ、そばにたった。まるで地の底からわいてきたように、いきなり太吉の両がわにたった。

ふたりとも髪を講武所ふうに結っている。いま、幕府がたのさむらいのなかではやっている髪型で、ひたいのそりあげがせまく、まげのうしろをすこしさげている。

やせて背の高いのが、のしかかるようにしていった。

「そいつをおろせ」

——なんでおろさなあ、あかんのや。

フンとにらみかえしたら、口をゆがめて、きみわるくわらった。

「さからうと、いたい目にあうぞ」

こんなところでけがでもしたらつまらない。太吉は、しばったなわをかたからはずした。

やせたさむらいが、カマキリのようにとびだした目でおけを調べはじめた。もうひとりには、からだをゆすりながら、ゆだんなくあたりをみまわしている。

おけのなかには、なにもはいいっていない。かん^{*}なできれいにしあげがされ、胴^{どう}には竹のタガ^{*}が二本、きちんとはめてある。どこからみても、ふつうのおけだ。

カマキリさむらいが、おけに手をかけた。^②太吉は、どきっとした。

——ひよっとしたら！

カマキリさむらいが、おけをたおして底をみた。あわてて太吉ものぞきこんだ。だが、なにもなかった。ごくふつうの底板がはめてあるだけだ。太吉は、ふうっとかたの力をぬいた。

ほんとうは不安だった。ただのおけではないような気がしていた。

けさ早く、旅すがたの目つきのするどい商人ふうの男が、親方をたずねてきて長いあいだはなしこんでいった。そのあと親方のきげんがひどくわるくなり、

「おけがかわいいそうや」

とかいいながらつくったのが、これだ。

「ごぞう、ぬげ」

カマキリさむらいが低くいった。

「えっ」

「きものをぬぐのだ」

——いやや、こんなところでぬげるか、あほっ。

ふいと横をむいたら、きもののえりをつかまれて引っぱられた。

「ぬがしてやろうか」

すごい力だ。しかたなく、ぬぐことにした。

まず、ふところから道具ぶくろをだして下におく。

「それは、なんだ？」

「おけを直す道具や」

「みせろ」

太吉は、なかから木づちと、かんなの刃はのようなしめ木をとりだした。どちらも親方がつくってくれたもので、大きさも重さも太吉にちょうどよくて使いやすかった。いつも持ちあるいているわけではなく、きょうはじめて外へもってでた。

店をでるとき、親方はいつものように、

「おとくいさきに、くれぐれも失礼のないようにな」

と注意した。そのあとまだなにかいいたそうだったが、そのまま「いってこい」と手をふった。ただ、この木づちとしめ木をもっていくようにつけくわえた。

はじめてだった。

おとくいさきでタガのゆるんだおけがあれば、あずかって店へもちかえり、直してまたもっていく。九つのときにでしりして四年たつが、直しの道具をもつてでたのは、きょうがはじめてだ。太吉は自分のうでがみとめられたような気がしてうれしかった。

だから、カマキリさむらいにみせ終わると、すぐにしまいこんだ。さわられたくなかった。③きたない手で心のなかをひっかきまわされるような気がしていやだった。

(中略)

「ちっ」

としたうちをして、さむらいたちは、ようやく太吉のそばをはなれ角かどをまがってすがたをけした。

「あはたれ、しょんべんたれ、鴨川かもがわのゴモク！」

相手にきこえないように悪口をいってから、きものをきて、くぐり戸をたたいた。すると、まるでまっていたみたい、さつとなかへひらき、わかいさむらいが顔をのぞかせた。

くぐり戸の内がわで、いままでのできごとをだまってきたにちがいない。

(中略)

「早くなかへ運べ」

わかさむらいは、えらそうにいうだけで手つだわらない。太吉があせをかきながら運びこむのをすすしい顔でみている。

「だれにたのまれた」

ぶすつとしてこたえる。

「親方」

「親方のところにたのみにきた者のことをきいておるのじゃ」

「しりまへん」

「ちっ」としたうちにして、おけをながめまわしはじめた。すこしかわいそうになって、けさ親方をたずねてきた商人のことをいつてやると、わかざむらいの顔色がかわった。

「奥へこい」

と、太吉におけをせおわせて先にたつた。

ざしきには、としよりのさむらいがすわっていた。身分が高い人らしくて、うす絹ぎぬのいい羽織はおりをきている。下あごが横にはったゲタみたいな顔をしており、いかにもがんこそうだ。

おけをみて、「ふむ」とうなってから、ふとい声できつぱりといった。

「これをばらせ」

「えっ」

太吉は思わずこしをうかした。

「タガをはずしてばらばらにするのじゃ」

「そんな、あほな！」

「これ、ことばに気をつけろ」

横から、わかざむらいがしかりつける。

しかられたってかわるもんじゃない。生まれてからずっと、このことばをつかっているのだ。さむらいにあわせるなんてごめんだ。

「ばらすのは、むりか？」

むりではない、かんたんだ。だが、せつかくタガをしめたのに、なぜばらさねばならないのかわからない。

「もう一度組みたてるとは申さぬ。ばらすだけでよいのじゃ」

「ばらすだけやて——」

「うむ、そのまま燃やすということになるかもしれぬ」

「そんな、あほな！」

太吉は、またさげんだ。

つくったばかりのおけを燃やすなんて、とんでもない。なにかひみつがあるみたいだが、そんなことは知ったことではない。

丸太を割り、かんなでけずり、かぞえきれないほどの手間をかけて、やっとひとつのおけができあがる。底板の外へおす力とタガの内へおす力とを、うまくつりあわせてしめていく苦勞をなんと思っているのだ。

「いやや、ばらさへん」

太吉は、きっぱりとことわった。

ゲタぎむらいが、ふしぎなものでもみるような目つきになった。

「なぜだ？」

「お、おけは、たきぎやない」

「ふむ、なるほどのう。しよくじんたましい職人魂というやつか」

うなずいて、わかぎむらいにいった。

「では、そちがやれ」

「はっ、どのように」

④「かまわん、ナタでたたきわれ！」

「はっ」

わかぎむらいがたちあがりかけるのと、太吉がさけぶのと同時だった。

「待って！」

ナタでたたきわられるのでは、あんまりかわいそうだ。太吉は、くちびるをきゅつとかんで、ふところから道具ぶくろをとりだした。

「やる気になったか」

声をかけたわかぎむらいに、へんじもせず木づちをにぎった。

——せっかくりつばなおけになったのに、ごめんやで……。

カシの木でつくったしめ木をタガと胴のすきまにあてて、ゆつくりとたたきはじめる。いっぺんに強くたたかず、すこしずつタガを下へずらしていく。

⑤二本のタガをはずしてしまっても、おけは、ばらばらにならない。十四枚の杉板が、しっかりささえあつてたっている。

それを一枚ずつばらしていく。

すると——。

B 板と板とがびったりくつついていた細い面に、字が書いてあった。一枚だけではない。つきつきにばらすどの板にも、小さい字がびっしり書きこんである。

字の読めない太吉には、なにが書いてあるのかさっぱりわからない。

ゲタぎむらいは、ばらした板を手にとって読みはじめた。あっちの板やこっちの板をちよつと読んで、順番をいれかえている。その目がしだいにキラキラ光りだした。

そして、ならびかえた板を最初から読みなおすと低くうめいた。

「ついにくるぞ」

わかぎむらいがひざをのりだした。

「それでは――」

「うむ。三千もの兵力で京へのぼってくる。あとひと月もすれば、わが長州藩が、ふたたび天下をうごかすことになる。高山、このおけは、すぐに燃やせ」

「はっ」

「ま、まって！」

太吉がさげぶと、ゲタぎむらいがじろつとにらんだ。

「なんだ、おまえまだそこにいたのか。もう用はない、かえれ、かえれ」

「お、おけは？」

「おけも用済みじゃ。すぐに燃やす」

これだから、さむらいはきらいだ。

おけをかつてに変なことにつかって、用がすめば燃やしてしまう。燃やされるおけのことなど考えてもみない。おけにだって心がある。つくった職人の心がこもっている。ちゃんとかかわれもしないで燃やされたら、かわいそうだ。

たちあがったわかぎむらいが板に手をかけた。その手をはらいのけるようにして、太吉は板の上からだごとかぶさった。

「おらがやる！」

外は、もううすぐらかった。

「このへんでよからう」

わかぎむらいは、うら庭の物置小屋のそばでたちどまった。

太吉がつんであるたき木のそばから、かれしばをひっぱりだして火をつけた。燃えはじめると、わかぎむらいがせかす。

「早くしろ」

まず、おけをしめる竹のタガを一本、そつと火の上ののせる。^⑥にくらしい火が、へびの赤い舌のようにはいまわり、やがてタガの全身をつんで燃えあがる。

一本が燃えつきるのを待つて、二本目をくべる。

「どんどん、ほうりこめ」

じれったそうに、わかざむらいがどなる。へんじもせずに太吉は、燃えるタガをじつとみつめている。そのとき、くぐり戸をはげしくたたたく音がした。

あわててわかざむらいが戸のそばへかけよる。

「だれだ」

早口のこたえがすぐにかえってきた。

「ながとや長門屋でございます。手ちがいが起きました」

「まわりにあやしい者はいないか」

「は、はい……」

「よしっ」

わかざむらいがかんぬきをぬいて戸をあけると同時に、ひとりの男がつきとばされてころげこんだ。

太吉は思わず息をのんだ。男は、けさ親方をたずねてきたあの商人だった。

商人のあとから、どやどやと、四、五人のさむらいがはいつてきた。そのうちのひとりがどなった。

「まゐるすいやく留守居役の乃美殿のみどのに会わしてもらおう。この男が京の町をうろついているからには、長州でなにかあったにちがない」

「ま、まっってください」

あわてるわかざむらいと商人を引きずるようにして、さむらいたちは奥へはいつていった。

火のそばに、太吉がひとりのこった。

くぐり戸はあいたままだ。

へいの外の道が夕やみのなかに白くうかんでみえる。高瀬川の小さな水音がきこえる。

とっさに太吉は、ばらばらのおけをしばり直して背中へくくりつけた。

——にげろ！

だつと外へとびだした。

いっきに橋をわたり高瀬川にそつて走る。背中ではびはねるおけをおさえながら必死に走る。^X

走りに走っているうちに息が苦しくなってきた。ふりむいてみたが追ってくる者はいない。ほっとひと息ついて足をとめた。

——やったぞ。

大声をあげてさけびたくなった。

——おら、おけを助けたんや！ 燃やさせへんかったんや！

背中からおろして、もう一度ちゃんとしぱり直した。

——びっくりするやろな、親方。

太吉がはじめて自分ひとりの力でおけをつくりあげたときのように、目を細めて、なんともうなずいてくれるかもしれない。大きな手で背中をばんとたたいてくれるかもしれない。

早く親方の顔がみたい。

太吉は、おけを背中にくくりつけ直すと、また走りはじめた。

(吉橋通夫『京のかざぐるま』より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

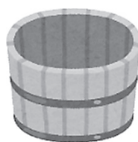
(注) * 長州藩……現在の山口県にあたる地域の江戸時代のよび方。ここでは特に江戸時代末期の周防、長門の両国を指す。

* 京やしき……江戸時代に各藩が京都に置いた藩のやしきのこと。

* 高瀬川……江戸時代に京都と伏見を結ぶために掘られた運河。

* かなな……木工用の工具。表面をけずって加工する目的でつかわれる。

* タガ……おけなどの外側にはめて、しめ固める輪のこと。



* ゴモク……ごみやちりのこと。

* 留守居役……ここでは京やしきの留守をあずかる役人のこと。

問一 ———①「舟入に荷物をおろした舟が気楽そうにうかんでいる」とありますが、このように舟の様子を描写することで、どのような

効果がありますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 水面を心地よく滑るように進む舟の様子を描くことで、太吉の背中を流れる汗の不快な様子と対比させている。

イ 積み荷をおろした舟の様子を描くことで、あくせくと休みなく働き続ける人間の様子を際立たせている。

ウ のんびりと川に浮かんでいる舟の様子を描くことで、京都の町が今日も平和である様子を暗示している。

エ 役割を終えた舟の様子を描くことで、それとは対照的に重荷を背負って苦勞する太吉の様子を印象づけている。

問二 ———②「太吉は、どきつとした」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 親方がかんなどできれいに仕上げた竹のタガをきちんとはめたおけを、カマキリざむらいが壊してしまうのではないかと感じたから。

イ おけには何か秘密があるのではないかと疑いを抱いていたところ、それがカマキリざむらいによってあばかれるのではないかと感じたから。

ウ カマキリざむらいに対する反感が相手に見すかされたために、この後自分がいたい目にあわされてしまうのではないかと感じたから。

エ 親方が不満をこぼしながら作ったおけであったために、カマキリざむらいにその出来の悪さを指摘されてしまうのではないかと感じたから。

問三 ———③「きたない手で心のなかをひっかきまわされるような気がしていやだった」とありますが、このときの「太吉」の心情の説明

として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア おけ職人だけが使うことが許される専用の道具である木づちとしめ木を、素人のさむらいなどには決して触らせたくないと感じている。

イ おけ職人にとって命にも代えがたい道具を馬鹿にされたことで、自分たちおけ職人全員が見下されたかのように怒りを覚えている。

ウ 店に持ち帰っておけを直すことができない状況なのに、大切な道具をさむらいに触られてこわされでもしたらたまらないと恐れている。

エ 自分の腕前を親方が認めてくれた証である道具がさむらいに触られると、ほこらしい気持ちが悪されるかのように我慢ならないでいる。

問四 ——— ④ 『かまわん、ナタでたたきわれ!』とありますが、「ゲタぎむらい」がこのような言葉を言ったのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア いつまでも煮え切らない太吉の態度にうんざりし、目の前でおけが割られるのを太吉に見せつけようと考えたから。

イ あえておけを乱暴にあつかうように指示すれば、おけに愛情を持つ太吉が自分の手でばらすと言い出すだろうと考えたから。

ウ 太吉がきれいにばらそうが他の者がたたき割ろうが、最終的には燃やすおけである以上、大差はないと考えたから。

エ 職人魂を持つ頑固な太吉の考えを変えるのは無理だと判断し、仕方なく他の者におけをたたき割らせようと考えたから。

問五 ——— ⑤ 「二本のタガをはずしてしまっても、おけは、ばらばらにならない」とありますが、板を束ねているタガをはずしてしまっても、おけが「ばらばらにならない」ことから、どのようなことがわかりますか。その説明として適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 親方が特別に愛情を込めて、ていねいに作ったおけであること。

イ 親方が不満を抱きながら、いやいや作ったおけであること。

ウ 太吉が時間をかけてていねいに、おけをばらしていったこと。

エ 太吉がさむらいに反感を持ってばらしたおけであること。

オ おけが使われないことに対して、太吉が反発していること。

カ おけが長年培われた職人の技術によって作られていたこと。

問六 ——— A 「使つてある杉板がぶあつい」と B 「板と板とがびったりくつついていた細い面」について、これらはいずれも杉板の様子を述べたものですが、一方では「ぶあつい」と述べながら、他方ではそれと反対に「細い」と述べているのはなぜですか。両者のちがいを説明した次の文の [] に入る言葉を二十字以内で自分で考えて、答えなさい。

前者 (A) は「おけに用いる板としては普通より厚い」という意味であるのに対して、後者 (B) は「 [] 」と

いう意味であるから。

問七 ———⑥「にくらしい火が、へびの赤い舌のようにはいまわり、やがてタガの全身を包んで燃えあがる」について、次の問いに答えなさい。

(1) この部分に用いられている表現技法として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 体言止め イ 比喩法 ウ 反復法 エ 倒置法

(2) ———⑥の表現はどのようなことを表していますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア おけを燃やす火が、わかざむらいと同様に太吉の職人魂を無視したことに、太吉が腹立たしい思いを抱いていること。

イ おけを燃やす火が、いまだに納得のいかない太吉の思いをあざ笑うかのように広がっていく様子に対して太吉がうらめしく思っていること。

ウ おけを燃やす火が、早くこの場から立ち去りたいと考える太吉をよそに、ゆっくりと広がることに太吉が焦りを感じていること。

エ おけを燃やす火が、タガをのみこんでしまったことで、自分が重大な悪事に協力してしまったのではないかと太吉が罪悪感を抱いていること。

問八 ———X「必死に走る」・———Y「また走りはじめた」とありますが、この二つの部分における「太吉」の気持ちにはどのようなちがいがありますか。Xを「前者」、Yを「後者」として、七〇字以上字八〇字以内で説明しなさい。

問九 次のア～エの人物は、この作品の中ではどのような人物として描かれていますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 太吉……見習いの職人でありながら一人前の職人魂を持っており、おけをぞんざいにあつかおうとするさむらいに反発している。

一方で、さむらいの様々な命令に対しても反抗しつつも、力でねじ伏せられそうになる場面では柔軟に従おうとするしたたかさがある。

イ 親方……太吉の師匠のおけ職人であり、太吉のために道具をしつらえたり、修行のために得意先におけを持っていかせたりしている。長州藩やしきへの届け物に出したのも弟子の成長を見込んでのことであり、厳しさの中に優しさを持っている。

ウ カマキリさむらい……幕府方のさむらいであり、太吉に対して力を見せつけることで自分の言うことに従わせようとする強引さがある。一方で、しつこくおけや太吉の様子を観察しており、臆病で神経質な部分がある。

エ わかざむらい……長州のさむらいであり、身分や年齢に応じて振る舞い方を変化させている。職人の弟子である太吉にはえらそうに振る舞うが、上役にあたるゲタさむらいや幕府方のさむらいには必要以上にへりくだった態度を取ることで自分を守ろうとしている。

三 次の①～⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨～⑫の——部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① 私の先祖は徳川のケライだったらしい。
- ② 九回裏のシュビでエラーをしてしまった。
- ③ 首相にはいつもゴエイの職員がついている。
- ④ 森の中で深コキユウをすると、気分が落ち着く。
- ⑤ ジシヤクを使って方角を調べる方法を学ぶ。
- ⑥ 父はぼくに知識というザイサンを残してくれた。
- ⑦ 銀行に親せきからもらったお年玉をアズける。
- ⑧ 勇気をフルい、難敵に立ち向かった。
- ⑨ いくつかの問答があり、面接は終わった。
- ⑩ 処方せんを持って薬局へ行く。
- ⑪ その日は都合が合わず、参加できません。
- ⑫ 絵馬に「合格できますように」と書いた。

